



TITLE:

南京明故宮趾雜記

AUTHOR(S):

小野, 勝年

CITATION:

小野, 勝年. 南京明故宮趾雜記. 東洋史研究 1940, 5(5): 359-372

ISSUE DATE:

1940-09-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/145704>

RIGHT:

南京明故宮趾雜記

小 野 勝 年

津浦鐵道を南下して浦口に着き、泥流蕩々たる長江

しなかつた。

を渡り、南京城内に入つたのは昨年十一月初旬、最早や黄昏に近かつた。鋪装された道路をバスで進む。車窓から見ると洋式建築がまばらに建つて居た。然し未だ畑の儘になつた空地が多く、事變前あの様に宣傳されては居たが、實際の所、南京に於ける國民政府の建設事業は其緒に就いたばかりと云つた印象だつた。宿を求める爲大通りから横町にせれると、一物を餘すなく破壊されて居る場所もあつた。其邊は人通りも稀れで、たまさかの居民は茫然と眺めて居るだけと云ふ痛ましい戦禍の跡も目についた。然しそれにも拘はらず搜しあてた支那宿は小綺麗で、言葉も比較的通じ、それからの滞在數日間は晩秋の天氣續きに恵まれると云つた次第で、此の都は自分に決して暗い氣持を與へは

「時は維れ金風肌に冷かに斜陽影淡き十月初四日の午後の三時、客は維れ遠く海を渡りて史蹟を探る日東多情多恨の學究の徒、而して地は維れ王侯將相才士佳人の荒塚殘碑歴々として數ふべく、歴史に悲しく悵惋に堪へざる金陵の故都、そゞろに昔を偲ばむとして、史筆を手にし詩囊を腰にし形勝を按じ興廢を論じ藝文を考へ豪華を懷ひて、城内を逍遙するのである」とは那波誠軒博士が其著「燕吳載筆」に披瀝された感懷の一端である。歴史に暗く感受の鈍い自分には六朝以來の故都に立つても、博士の如き感慨には到底耽り得なかつた。然し城内の東部にあたつて存在する明の故宮趾が會つての規制を窺ふ可く未だ相當殘された儘で居ることを知り得て甚だうれしく、尠からざるときめきさ

へ覺えた。

思ふに北京紫禁城の規範となつたのが南京のそれである。前者の研究には一應後者に就いて知る必要があり、後者亦前者から推測し、或は補足して舊形を明かにすべきものだとは豫々考へるところであつた。「明史」輿服志宮室制度の條には永樂十八年北京を建つ、凡そ宮殿門闕の規制は悉く南京の如く、壯麗はこれに過ぐと記されて居る。永樂十五年に起工、十八年に完成した北京宮殿の規制は大小の差こそあれ、殆んど南京宮殿其儘を踏襲したものであることがこの記事からも窺はれよう。

太祖朱元璋は至正十六年集慶路を陥れ、これを應天府と改稱した。それから十年後、即ち至正二十六年には愈々鍾山(紫金山)の南に地を下して新宮造營に着手することゝなつた。史には素朴にして彫飾を加へずと見え、一ケ年未滿の短期間で落成したとある。これを推して考へるならば、其規模も甚だしくは廣大でなかつたと思はれる。然し、前朝には奉天・華蓋・謹身の三大殿があり、後宮には乾清・坤寧の二宮も備はり、皇城も亦築かれたものであつた。かくて彼は其翌年

「西曆一三六八年」帝位に即ぎ、國を明と號し、元を洪武と改め、以つて天下に君臨した。更に「明史」地理志を見ると、應天府の條に洪武二年九月始めて新城を建つ、六年八月成ると記して居る。これは建國の理想にもえた帝が應天府城内に舊時の儘蹋躋するに肯んぜず、鍾山の南、府城の東に新宮の造營を行ふと共に、改めて城垣の大擴張を行つたことを簡單に述べた記事に外ならない。以下更に引用する明の陳沂の「金陵古今圖考」の記載は崇禮郷の地に燕雀湖の一部をも埋めてた事を初めとし、當時の大事業を要領よく記して居る。即ち、

考諸都城之域。惟南門・大西・水西三門。因舊。更名聚寶・石城・三山。自舊東門處。截濠爲城。沿淮水北。崇禮郷地。開拓八里。增建南出者二門。曰通濟・正陽。自正陽以東而北。建東出者一門。曰朝陽。自鍾山之麓。曰龍廣山。圍繞而西。抵覆舟山。建北門。曰太平。又西。據覆舟・鷄鳴山。即鷄緣湖水以北。至直瀆山。而西八里。又建北出者二門。曰神策・金川。自金川。北繞獅子山。即盧於內。雉蝶東西相向。亦建二門。曰鍾阜・儀

鳳。自儀鳳迤而南。建定淮・清涼二門。以接舊西門而周。、、東盡鍾山之南岡。北據山控湖。西阻石頭。南臨聚寶。貫秦淮於内外。橫縮屈曲。計周九十六里。外郭。西北據山帶江。東南咀山控野。闢十有六門。東五。曰姚坊・仙鶴・麒麟・滄波・高橋。南六。曰上方夾岡・鳳臺・馴象・大安德・小安德。西一曰江東。北三曰佛寧・上元・觀音。周一百八十里。皇城。居極東偏。正門曰洪武。與都城正陽門直對。在宋元都城之外。甍雀湖地。

と述べて居る。これに據ると城周九十六支里、門十三所。東は朝陽〔今の中山門〕、南は正陽〔今の光華門〕通濟・聚寶〔今の中華門〕、西は三山〔今の水西門〕、石城〔今の漢西門〕清涼・定淮・儀鳳〔今の興中門〕、北は鍾阜〔今の小東門〕金川・神策〔今の和平門〕太平の諸門云々のことが見える。これ現在の南京城に外ならないものである。

蓋し、舊城は五代楊行密の築くところ、初め金陵府と呼んだが、南唐こゝを西都とし、宋に江寧府・建康府、元に集慶路と改める等名稱の變更はあつても、城

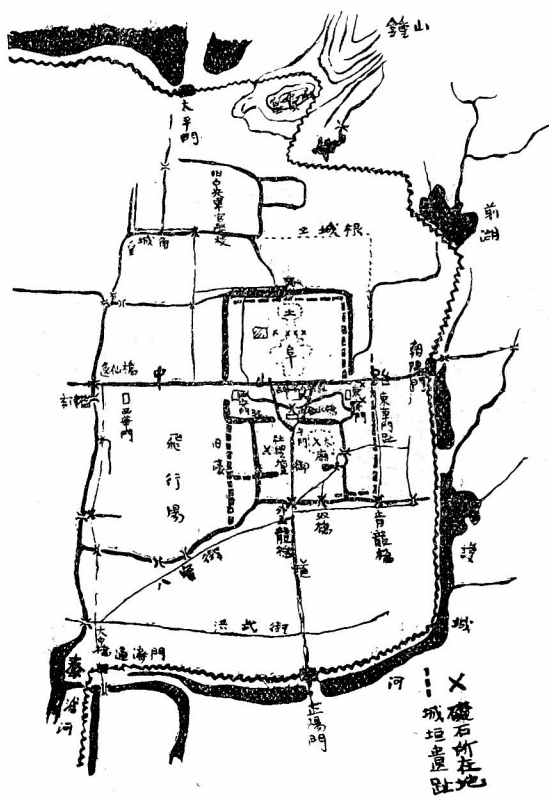
廓は殆ど損益することなく、周圍二十支里、今日も其大略は辿り得るものであつた。新城は舊城に比較すると面積は約三倍餘の擴大をしたのである。

偕て、城壁が築かれ城濠が廻らされ、唯だ門のみを十六ヶ處造つたに過ぎぬとは云へ、周百八十支里の外郭が定められると、太祖は再び大規模な宮室造營を行ひ、明の威信を天下に示すべき必要を感じたであらう。洪武八年には大内諸宮改建の詔勅を發し、同十年十月遂に告成して居る。これと前後して、宮城南面の左右に位置する太廟・社稷壇、或は正陽門外の大祀殿等も各々改建された。かくて同年中には帝京としての偉容が漸く整備するに至つたのである。

蓋し、南京明故宮の宮殿及び門闕の名稱を最も多く列擧して居るのは自分の知る限り杜澤の著「洪武京城圖志」であらう。此書は其序に依れば洪武二十八年の編纂であるから、太祖時代の宮殿に就いては可成り信用が出来る。然し遺憾乍ら圖を掲げながら説明を加へず、別に唯だ名稱を羅列するに止つて居る爲、正確に其場所を定めるのに不便が多い。そこで比較的くはしい記載だと考へられる「皇明泳化類編」宮殿の條を

左に記すと、

太祖定都金陵。造皇城於都城內之東。迤鍾山之陽。正南曰洪武門。內曰承天門・端門。端門之北。有左闕門・右闕門。洪武之東。爲長安左門。西爲長安右門。東近北爲東華門。內曰東上南門・東上北門。西近北爲西華門。內曰西上南門・西上北門。北爲玄武門。內曰北上東門・北上西門。近子城。

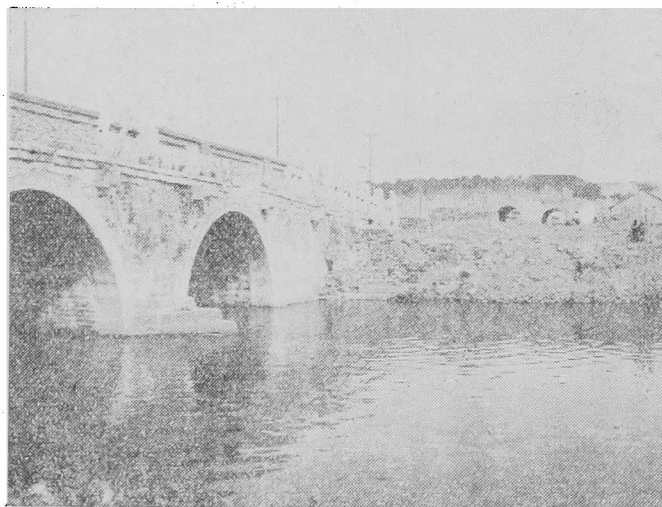


明故宮趾略圖

東曰左闕門。西曰右闕門。大內六門。正中午門。左爲左掖門。右爲右掖門。東爲東安門。西爲西安門。北爲北安門。午門內大殿前爲奉天門。左小門曰東角門。右小門曰西角門。東西隅有東西角樓。東角之南有左順門。門南曰文淵閣。西角之南爲右順門。奉天門之內。爲奉天殿。東曰文樓。西曰武樓。殿之左爲中左門。殿之右爲中右門。奉天後爲華蓋殿。華蓋後爲謹身殿。由左順門入。後爲乾清宮。宮後爲坤寧宮。又一殿。曰柔儀。曰春和。、、、建文元年冬十二月。省躬殿成。在乾清・坤寧二宮之間。爲退朝燕息之所。

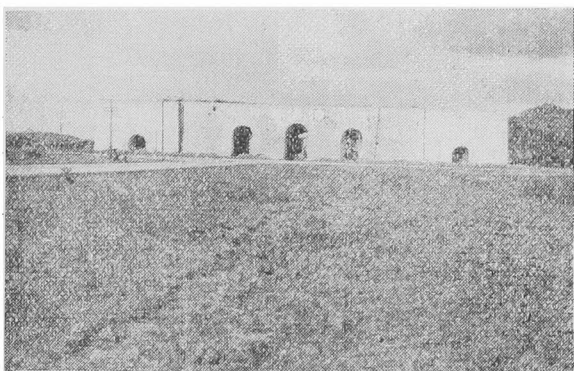
と見える。此記載と「洪武京城圖志」宮闕の條とを比較するならば、宮殿の數及び呼稱は殆ど一致して居る。唯だ後者に乾清宮と坤寧宮との間に建てられた省

躬殿の掲載されて居ないのは建文元年の建築なるが爲だ。其他東・西角樓が東・西門角樓となつて居るが、これは疑ふ迄もなく同一のものであらう。然るに門名は圖志に記載して居るのが數多く、廟街・社街・廟左・社右・西北・親蠶の六門は前者には見えない。



門華西と橋津玄

私は南京市街地圖を手にしながら、鋪装された中山路を東に進んだ。逸仙橋の手前から南へ折れ玄津橋を渡ると前に塹造の門趾がある。三個のアーチを開いて東面した堂々たる建物が即ち西華門に外ならなかつた。此邊から視野は割合よく開け、彼方に二個の門趾のあるのが目についた。何れも塹造で、一は南面し他は西面して居た。中山路に引返して東進する。左手には數ヶ處の宏壯な建物があつた。更に進むと空地となり、空地の一部に黃い地肌を現した部分が稍と高い臺狀をなして居た。其處が宮殿の基壇の部分であらうと一見して肯けた。一段と高い所に立つて南面すると五のアーチを開いた塹門趾が我に對する。これが即ち午朝門〔午門〕と稱されて居るものだつた。午朝門の北側に當つて建築物の残骸があつた。舊の古物保存所だ。後になつて聞いたところでは直接今次の戰鬪の爲に破壊された譯ではないさうである。皇軍が入城した當時は未だ比較的荒されては居なかつたが、難民が集り、管督者の居ないのをよいこととして、古物を奪ひ去り、建物をも見る影もなく荒したのだと云ふ。其後識者の注意するところとなつて、残された一部の石刻類



む望りよ南 (門朝午)門午

橋が架せられて居た。これが内五龍橋であつた。即ち「明史」の輿服志に、建大内金水橋。並建端門・承天門・角樓及長安東西門。とある。金水橋の一である。誠軒博士に依ると「音時の午門の北に在る五龍橋の五橋の欄干の彫刻、石梁石筍の壯觀も皆哀愁の種である」と記して居られる。博士は親しく石欄干を見られたのであらうか。今は唯だ上面を平凡にコンクリー

が鶏鳴山下の舊中央研究院に搬ばれ其處で保管されたのだつた。此の古物保存所が奉天門の位置である。此處に惆悵することしばし、

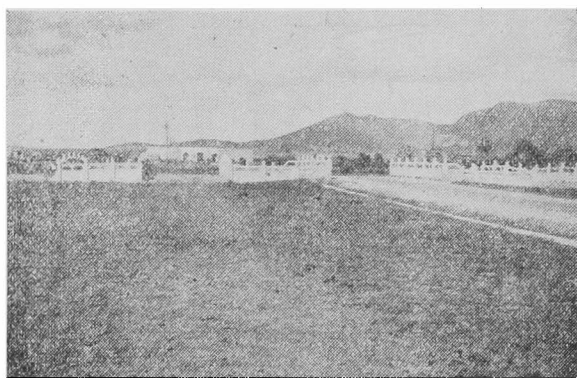
午朝門に向つて進むと、並列した五個のトで固めた五個の橋が並んで居るだけだつた。午朝門の南から正陽門に向つて一直線に鋪装道路が延びて居た。云ふ迄もなく御道だ。御道には正陽門と午朝門の以外に會ては端門・承天門洪武門の三門が縦に並んで建つて居たのである。其位置は何の邊であつたであらうか。

今は残礎も見當らなかつた。然し唯だ承天門前の外金水橋のみは、殆ど其儘残つて居た。然し是



む望を地臺の趾殿宮りよ趾門天奉

つて昔時の壯觀を偲ばせるに足りた。
私は外五龍橋から引返した。ふと右手を見ると畑中に土阜があり、數基の礎石が轉がつて居た。太廟の趾だと直觀する。近づいて其邊の農夫に尋ねた。此處が太廟か。然りと答へ乍ら怪訝顔で私の行動を注視して居るのがをかしかつた。今度は御道の左手に向つた。



外五龍橋より午門を望む 遙かなる山に鐘山あり

も道路改裝の際、舊態を稍と變更したと推測され、中央の橋が特に幅廣であつた。此橋には勿論近時の作ではあるが、皆石欄干が架せられて居た。そのため内に五龍橋に比較すると却

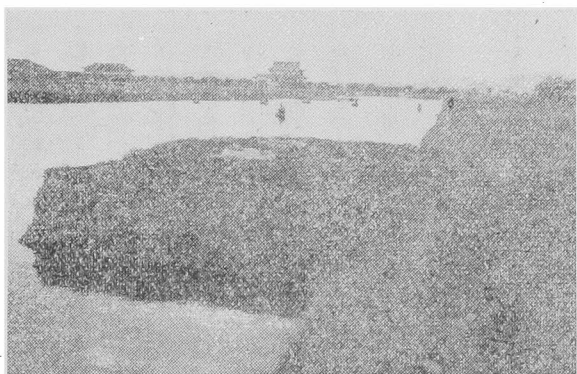
彼方此方に礎石があつた。やうやくにして社稷壇趾らしいところを捜し出すと、其附近には櫺星門に使用した石柱も二三倒れて居た。私は曾て櫺星門の寫眞を何かの本で見た様に記憶する。若し記憶に誤りがないとするとこれが倒されたのも極めて新しいことである様に思はれた。西部一帯を占める飛行場を擴張し、其の爲に昔の壕が東寄りに移動して、今は殆んど壇を洗ひける迄になつて居た。櫺星門の倒されたのも或は其時のことであらうと考へられる。「明史」の禮志其他を按ずると、洪武十年に社稷壇を改建した記載があつて其規制は大略推



太廟趾

想が付く。諸處に残つて居る礎石を辿つて行くと更に確められる譯なのであるが、苦手の支那犬が猛烈に吠えるので、俗に此邊を大園子と稱して居ると知り得たのみで引返してしまつた。

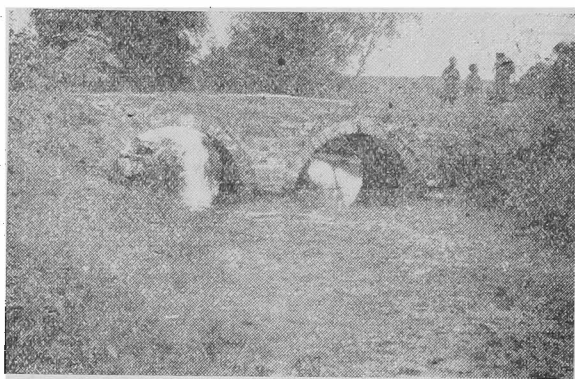
宿は朱雀路の南口に近い吳宮飯店だつたので日を改めて故宮趾に赴いた時は建康路から大中橋を渡り、八寶街を過ぎて再び外五龍橋に達した。隋の文帝は陳を滅した際城邑宮闕灰燼に歸し、六朝の文化一朝に湮滅したと傳へて居る。劉禹錫の烏衣巷と題した詩に「朱雀橋邊野草花」などあるのを思ひ出すと、當時の御道も唐代にはすっかり荒廢してしまつたらしい。されば今の朱雀路が當時の御道であるなどゝは輕率に云ひ得ないであらう。然るに大中橋は五代以後、洪武の城垣擴張以前迄、舊城東門外の橋であつたことは疑ひない。即ち初め白下橋と云ひ、後に長春橋と改め、今又轉じて大中橋と稱して居るのだ。星移り時變じ、橋も



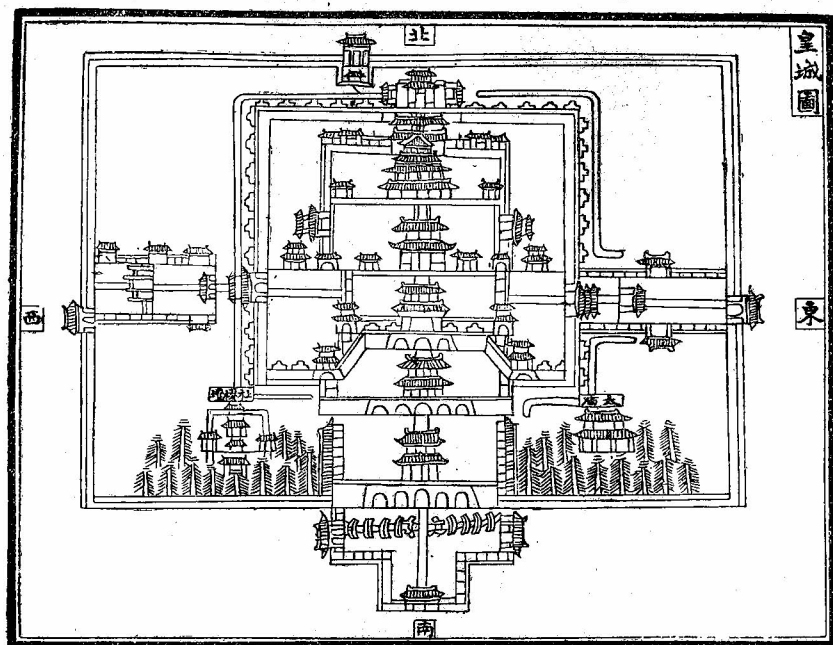
るれらへ考とのもの門星橋は石礎 近附趾壇稷社

今はコンクリートで固めてあるが、エイホアヤホと掛聲し柴や肥桶などをついで通る人々のにぎはしさ、或は橋下の黒ずんだ流など其昔と殆ど變りはあるまい。流を下れば秦淮と呼ぶ。煙は寒水に籠り、月は沙に籠る。其昔詩人が美しいと觀じたのは夜景なるが爲であつたのかも知れない。私はこんなことを思ひ浮べながら大中橋を渡つて東北に進んだ。八寶街を進むことしばし、左側は飛行場、右側は畑であつた。道路は幅廣くないが注意すると皆切石を敷詰めて居た。南京市街地圖に依ると八寶街の東寄りに白虎橋と云ふのが記されて居る。然し飛行場擴張の爲にそれは奈邊か全く不明となつてしまつて居た。外五龍橋に達してから今度は東へ向つた。此道も亦切石を敷詰めてあり、道に沿うた護城河とでも名づく、可き濠に双橋と青龍橋とが架せられて居た。青龍橋は白虎橋に對する名前だが、

た。其左側に沿うて平行に土阜が延びて居た。濠の北側にも若干土阜の起伏があつたが、此の方は更に明白に城壁の趾であることを示して居た。此城壁が云ふ迄もなく皇城の東壁なのである。而も側には城に沿ふ濠のないことが注意された。皇城の東門、即ち東華門趾は礎石があつたので直ちに明かとなつた。此門趾に立つて西



土地の人は別に回籠橋と云つて居た。青龍橋を渡つて北にすゝむと道路は埽敷きとなつ

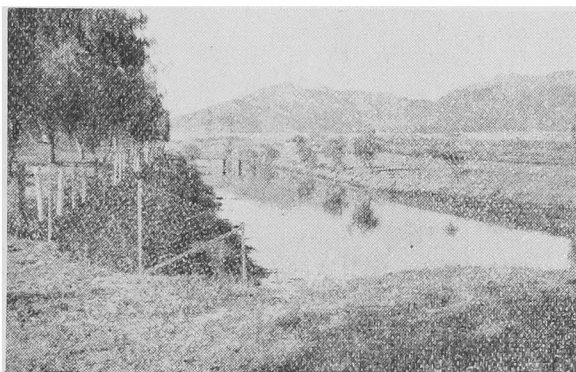


洪武京城圖

面すると、壇の東安門と相對するのだつた。北京では皇城の東門を東安門、宮城のそれを東華門と呼んで居るが南京の場合は名稱が逆なのである。然し猶確めて見ようと附近の百姓に尋ねたが、

唯だ東華門と答へるのみで一向に要領を得ることは出来なかつた。東華門と東安門とを結ぶ道路の兩側にも南北に向ひ合つた數基の殘礎が存して居た。何の目的の建築物か其際は全くわからなかつた。然し北京に歸つてから書物を繙きそれを東上南門と東上北門の所在地に比定し得て當時の疑雲は氷解した。

再び宮殿趾に向つた。外濠には今も猶水をたゝへて居るので、其區域は明瞭であつた。稍ゝ高い所に立つて北の方を見渡すと、奉天・華蓋・護身の三大殿の基壇ではあるまいかと思はれる部分が南天に高く臺狀をなして居た。臺は一度低くなり、更に又續いた。其邊に東西に亙つて礎石があつた。固より動かされた形跡



宮城の東側の濠

のものなどもあるのではあつたが、これは恐らく前朝後宮を限る諸門に使用したのではあるまいかと思はれるものであつた。そして礎石の方向を西に辿ると、此

處には石を組んで隧道の様なものが作られて居た。一見して花園の跡だと知れたが、果して初明以來のものか否かは今も疑ひを挿んで居る。其處から北紫禁城で譬へれば神武門にあたると思はれる邊に行つて見た。然し礎石は發見し得ず、唯だ地圖に見える様に今も此邊を后宰門と稱して居ることを確め得たのみ。北側には幅二三十米許りの濠があり滿々たる水をたゝえて居た。そのため其處から直ちに北進することが出来なかつた。

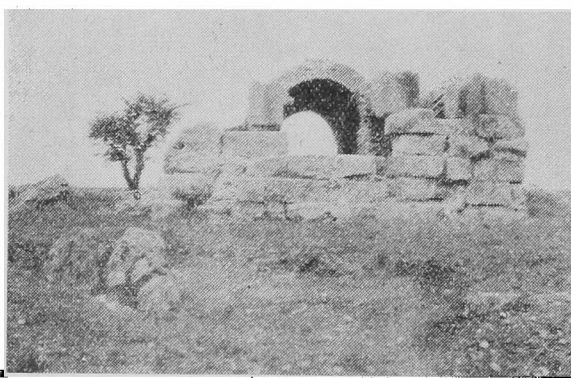
若し往時も此様だつたとすると北安門前は吊橋が架せられて居たことになる。そこで廻り路をして再び其の向ひ側に達した。其處には未だ二三の礎石が残つて居た。北京の場合だとこれが北上門であるが、附近の人

々は此處をも亦后宰門と答へた。后宰門とは北安門の俗稱である。「酌中志」には北安門は俗に云ふ厚載門のことだと記して居る。后宰と厚載とは普通である。唯だ北京の場合は皇城の北門にあたり、南京では宮城のそれに當るのだ。地圖を按ずると此處から更に北方土城趾なる地名があつた。それは皇城の北壁趾であることが窺はれたが、其處までは遂に行き得ずして引返した。

歸途后宰門近く一郭の建物があり、塼を以て垣を廻らして居るところを過ぎた。其處に用ひられて居る塼は大形で一見して近時のものではないことが明かであつた。更に注意すると側面に文字を印して居る。近づいて判讀しやすいものを選ぶと、

南□□提調官通判王武、司吏萬宗程、豐城縣提調官縣丞譚九臯、司吏汪憲とあり、或るものには

總甲湯起先、甲首柯千奴、小甲柯永年、密匠洪大貴、



花 園 趾

造磚人夫柯似新。

と印してあつた。大多數は二行に印してあつたが、極く稀には

安慶府潛□縣提調官主簿劉知。

など、一行に印したのもあつた。

造塼責任者の名を印したものは總甲某・甲首某・密匠某・造磚人夫某の形式で一定して居たが、地方官の名を印したものは府の場合は某府提調官某とあるものも、或は某府提調官通判某・某府提調官判事某・某府提調官同知某・某府提調官知事某等となつて居り、縣の場合は某縣提調官知縣某とあるものを初めとし知縣の代りに主簿・縣丞・典史等となつて居たものもあつた。提調官の下役たる司吏の方は悉く司吏某となつて居る。此書式には例外のものは認められなかつた。此等の大塼は故宮造營の際使用されたものであることが知られ、粗製濫造品とは異り、焼成りも硬く、文字を印

して責任の所在を明かにして居る點が尠なからざる興味を惹くものであつた。恐らく造塼者の名を印したのは官營の造塼廠で焼いたものであらう。提調官名を印したものは朝廷に對して各府縣が調達に應じたものと解せられた。然し各府縣がまさか各自の地方で焼きこれをわざ／＼南京迄持搬んだものだとは解し難い。此等の點に就いては他日機會があればもう一步進んで明確にして見たいと考へた。

黃甫路を北進すると突當りが舊中央軍官學校であつた。正門の前で道は左右に分れ、其道の南側には東西に亙る濠があつた。これが皇城の外濠であるのだつた。濠に沿うて西すると一地名を見つけた、即ち皇城角と云ふ。これで私の踏査は終つた。

偕て猶若干の蛇足を加へよう。彼の傳奇物語り化された建文帝の一生は因果の理を斯くあれかしと冀ふ者にとつてはほつとする様な一齣ではある。然し「建文四年燕王反して兵は六合に至る。己丑燕王金川門を犯し、都城陷り、宮中火起り、帝終る所を知らず」と云ふのが嚴然たる事實であつた。其際に洪武以來の絢爛たる宮殿閣樓一朝にして灰燼に歸したらしく、燕王は

即位するや同年中に奉天殿の再建に着手し、永樂元年正月元日には此處に出御して群臣の朝賀を受けた。然し「皇明實錄」に依ると此殿は舊奉天殿の西方に當つて建てられたのだと見える。帝の北巡は永樂七年で、北京に歸還したのは其翌年のことであり、更に衙門一般が北遷し終るまでにはそれから約十年の歲月を闊して居る。従つて其間には宮殿等の再建も多少は行はれたであらう。更に明末、崇禎帝景山に自經した後、福王が南京に擁立された際にも二三の宮殿が造營されたと記されては居る。然し要するに洪武・建文時代の偉觀には復するまでに至らなかつたと思ふ。福王が擒へられてから、清軍は此處に駐防八旗を屯せしめた。其際將軍都統は舊中央軍官學校趾に存したと云ふ。故に清代も亦故宮其物に差して手を入れなかつたであらう。かう考へて見ると少くとも清末までは荒れつゝあつたとは云ひながら、城壁門樓殿屋等其一部分は多少明初の姿で残されて居たと思はれる。然るに咸豐三年太平天國の亂が南京に波及し、故宮に對しても亦甚しい痛手だつた。それは云ふ迄もなく此時兵火と破壊との洗禮を受けたことである。其後賊徒の新都建設は此

處の用材を利用せずには置かなかつたであらう。更に又ひどい破壊として彼等と湘軍の交戦も數え挙げられ

諸宮の如き、自分の知る限り明代の根本史料に見えない宮殿名を記して居る。其

制は年一年と湮滅するに至つた。換言するな

點で更に考究すべき興味を惹くものではある。然し乍ら圖自體としては實際を無

らば舊規を窺ふ爲には文献のみでは勿論不

可き點が尠くない。此の他「萬曆應天府志」などにも

可、實地踏査によるもの不明の個處のみ徒に多

るかも知れない。此書は我が内閣文庫に存するところ

の現狀にたち至つたのである。

の天下の孤本であり、私は未だ披見するの機會を持つて居ないものだ。此外民國

蓋し、明故宮の配置を圖示したものは既に

は朱僕氏の「金陵古蹟圖考」中に明代宮城圖がある。本

引用した「洪武京城圖志」の皇城圖が擧げら

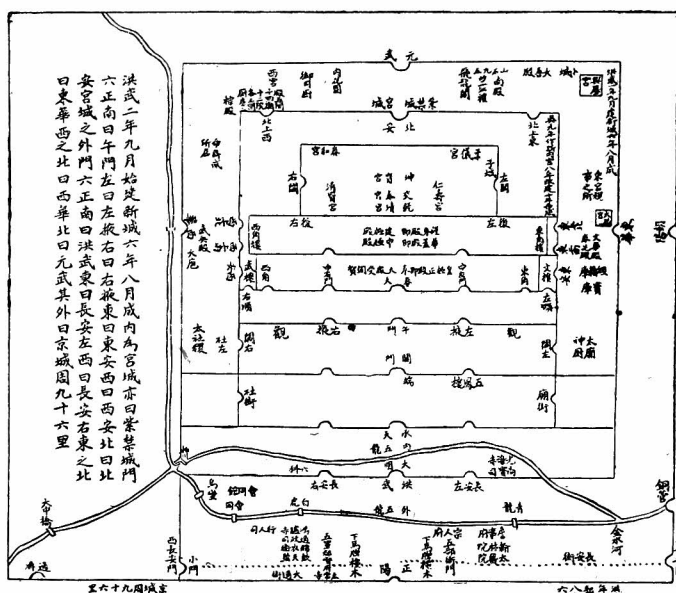
れる。これは鳥瞰圖式のもので其概略を知るには輕便ではある。然

し何等の説明もなく、憾むらくは實證に當つて疑問が

續出する次第だ。次には「同治上江兩縣志」の明宮城

の皇城圖が擧げられる。これは鳥瞰圖式のもので其概略を知るには輕便ではある。然

し何等の説明もなく、憾むらくは實證に當つて疑問が續出する次第だ。次には「同治上江兩縣志」の明宮城



(志縣兩江上治同) 十第圖城宮明

圖は新時代の作成だけに實地に即し、諸書を考覈し、最も依據するに足るものと思はれる。然し乍らこゝに

も亦た異論を挿む可き餘地がない譯ではない。それは先づ皇城東壁が實際より東に偏し過ぎて居ること、其結果東華門の位置を誤るのみならず、青龍橋北に一門を開いて居る點である。次に午門を凹字形に現はして居るが、これは寫眞でも直ちに分る通り、北京の場合とは同一でない。猶亦洪武門の位置も氏の地圖に依ると更に少しく南、即ち光華東街の線まで進める可き

と思ふ。猶氏の考證とは關係がないことであるが、圖志の門名中には、位置の手掛りがつき兼ねる二門がある。それは西北門と親蠶之門とだ。前者は恐らく宮城の西北部に存したと考へられ、後者は其名の如く親蠶壇の門なのだが今日其位置は不明である。

ではあるまいか。私の購入した市街地圖に據ると光華東街が即ち洪武東街となつて居る。此圖に誤りがないものだとすると洪武東街の名稱は洪武門の存在に基くものであると考へて差支はない。更に廟街・社街二門の位置に就いても異論がある。氏は廟街門を大廟の正門、社街門を社稷壇のそれに比定して居る。然しこれは門名に街の字の見えるところから推しても肯き難い。北京の端門の南と北とに御道を挟んで東西に向ひ合つた四個の門がある。即ち太廟街門・社稷街門〔南〕、廟街・社右門だ。「洪武京城圖志」宮闕の條には社街・廟街・廟左・社右の諸門名があるが、これを前者と比較すると廟左が神廚とあるのみで殆ど一致して居る。このことに依つて考へるに氏の比定は當を得て居ない

と思ふ。若し支那宮城史と云ふものが成立するとすれば南京明故宮の持つ意義は尠からぬものがあるに相違ない。それは單に建築上の見地のみからではなく、廣く文化上からも解明す可き重要な問題を含んで居ると考へられるのである。然し此等に關した議論に觸れるのは今の私には餘りにも無準備で其資格に缺けて居る。それよりも唯だ以下のことを一言だけ記すこととしよう。それは故宮趾からの歸途處々で男女の者が盛んに石塊を小さく碎いて居ることであつた。脆い石灰石は金槌の僅かな力で容易に碎かれて淡紫色の美しい地肌を表はして居た。此の石灰石と云ふのが即ち曾ての建築物の礎石なのである。私には此等の中の或るものは保存される可き價值を持つものであると思はれるのであつた。せめて正確な記録としてでも後々に残されたならばと痛切に感じた其事である。(完)